

総義歯技工に携わる歯科技工士の羅針盤となる1冊

『デジタル時代に生きる総義歯哲学』 を読んで

金沢歯科技研（石川県金沢市）

小田垣 享 Toru Odagaki

歯科技工界において、人材不足が問題となり、歯科補綴装置の供給が困難となってくると話題になっている。そこでDX（デジタルトランスフォーメーション）を利用して問題解決にあたる試みが盛んに取り組まれている。歯科技工界ではすでに、クラウンワーク、インプラントの診査・診断・上部構造製作や、マウスピース等の補綴装置製作においてはデジタル技工（CAD/CAM）を利用して行われることが増え、必要不可欠な術式となっている。チェアサイドにおいてもIOS等の高精度化と普及率の向上で、Digital Dentistryはますます広まっている。切削加工技術の普及と相まって、近年では3Dプリンターを利用したパーシャルデンチャーのフレームワークも臨床応用が一般的になりつつある。

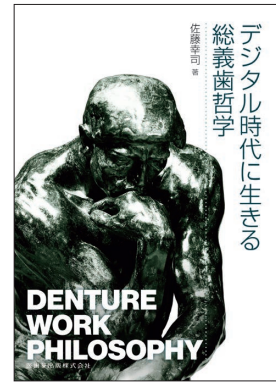
そんな折、2025年12月1日に3Dプリント総義歯が保険収載された。そのような時代を迎える中で読者の皆さんにお勧めするのが、佐藤幸司氏が執筆された『デジタル時代に生きる総義歯哲学』である。本書は3Dプリント総義歯の保険収載より3カ月ほど早く発刊され、まさに時代に則した1冊と言える。本書で著者は、デジタルであろうとアナログであろうと歯科医師・歯科技工士が共通の理論・哲学に基づき診査・診断を行い、解剖学・生理学のセオリーに則した診療や治療および、技工操作・製作を行うことが重要であると説いている。そのためのノウハウを、多くの写真と図版を多用し丁寧な解説で執筆されている。まさに総義歯

技工のバイブルと言える名著だと思われる。

* * *

筆者は技工歴40年ほどだが、歯科技工士として従事し始めた時代には「補綴は、総義歯に始まり、総義歯に終わる！」と言われていた。総義歯技工のデジタル化は始まってまだ日が浅く、課題も多いと思われるが、新しいマテリアルが導入され精度、生体親和性、生産性等が日々向上し続けている。チェアサイドでのIOSの精度と利便性向上により、コピーデンチャーを高精度で複製することも可能となり、新義歯製作等においてはCADによる設計・修正も容易になりつつある。特に患者の義歯データを保存することでアナログ法に比べ短時間で高精度の総義歯技工が行えることは患者と医療従事者双方にとってこのうえない福音である。

しかし、術式・マテリアル・道具が変化しても著者が述べているコンベンショナルな総義歯補綴のセオリーや目標が変わることは有り得ないと思われる。その普遍的なノウハウが、本書では随所に記述されているので、初学者はもちろんのこと、総義歯臨床に携わる歯科技工士、歯科医師の方々にお読みいただきたい。クラウンワークやインプラントワークに携わる方々にもぜひ、一読をお勧めする。「I編 デジタル時代でも変わらない総義歯の原則」、「II編 満足度を向上させる患者情報の適正入手」は、まさに解剖学的・生理学的な総義歯技工学を簡潔に理解しやすく解説されている。特に患者固有の



佐藤幸司 著

定価：9,900円

（本体 9,000円＋税10%）

A4判カラー／128頁

医歯薬出版株式会社 刊

人工歯排列の章は総義歯技工に携わる経験者の方々にはご確認のうえ実践していただきたい。また、オーバーデンチャーの章についても注意点が簡潔に述べられている。そして「III編 総義歯臨床のフィロソフィー」では臨床総義歯補綴学における1. Philosophy, 2. Concept, 3. Theory, 4. Referenceとは何かについて、それぞれ解説されている。著者もあとがきで述べているが、総義歯学とは解剖学、生理学に基づいた口腔機能形態学であると思う。

* * *

著者の佐藤幸司氏とは30年ほどのお付き合いである。氏はBPS（Ivoclar Vivadent社）の日本人初の公認テクニカルインストラクターで、筆者もコースでご指導いただいた恩師であり、現在もお会いするたびにご指導いただいている。現在に至るまで多岐にわたり色々なことを学ばせていただいたが、本書は技術解説書でありながら、著者の臨床総義歯技工の記録の集大成でそれらが余すところなく網羅された技工録である。アナログ・デジタル問わず総義歯技工に携わる方々にとって羅針盤となる名著である。ぜひ、座右の書として本書を手にとられることをお勧めしたい。